

1. 女性医師と男性医師の違いとは？

I don't mind living in a man's world as long as I can be a woman in it.

— Marilyn Monroe (1926~1962年)

「男社会」なんて気にしない。ただし女でいられるならね。

本音トーク 1 キャリアダウンが女医に偏る現状は否めない

まず、はじめに、私は日本で医学部を卒業後、日本で4年間、アメリカ・カナダで9年間医師として働いてきました。その間、幸運なことに、仕事をするうえで「女性医師だから…」ということで、特別な扱いを受けたことはほとんどありません。それは、日本の研修時にはまだ結婚や出産をしておらず、男女問わず、皆ががむしゃらに研修に集中している時期だったからだと思います。

当時も、妊娠や出産を期に医師を辞めたり、常勤からパートタイムに移る先輩女性医師をみて、「私も将来こうせざるを得ないのかな…」と不安に感じてはいました。いわずもがな、女医にとって結婚、出産、育児等の家庭形成は、キャリアを追い求めるうえで負担にもなり、「キャリア」と「家庭」のバランスは切実な至上命題です。

しかし、その後渡米してから4年目で結婚、5年目で第1子出産、7年目で第2子出産を経験しましたが、この間も同僚の男性医師と対等に、もしくはそれ以上の仕事量をこなしているという自負はあります。もちろん、仕事以外の家庭内では、妻として、母親としての役割があるため、それらが仕事に与える影響も皆無ではありませんが、いろいろと工夫をすることで職場にいる限り、1人の医師として仕事を続けています。

そして一人前の仕事をこなす以上、「男性だから」「女性だから」ということで仕事内容を変えるのは差別に当たります。ですから、北米で仕事をしていて男女差というのはあまり表立っては感じません。

とはいえ、アメリカでも子育てのため自らの希望でパートタイムに移る医師や、給料を減らしてでも当直を取らないポジションに移る医師は大勢います。これは男女ともにあり得ることですが、どうしても女医にこのようなキャリアダウンの傾向が多いのは事実です。アメリカの大規模な統計調査によると、「年齢」「専門分野」「臨床や研究にかける時間」などを調整しても、

- 女医のほうが平均給料は低く、
- アカデミックランクの昇進は少なく、また
- 家事にかける時間が男性医師より週 8.5 時間多い

というデータがあります^{1)~3)}。このような状況を鑑みてか、最近はこの学会に行っても、「Women in Medicine」というテーマで話し合うセッションが多くみられるようになりました。やはり北米でも、女性であること、母親であることが医師としてのキャリアや報酬の不平等などに潜在的に影響を与えているのが現状です。

そもそも男性医師、女性医師の違いって、何でしょうか…？ まず、4つの視点から眺めてみましょう。

本音トーク 2 患者視点：妊娠・出産・子育て経験は1つのアドバンテージ

英語で女性医師は「female doctor」といいますが、この言葉を聞くのは、患者視点から話す場合が多いのではないのでしょうか。患者には、「男性医師に診てほしい」「女性医師に診てほしい」など、それぞれ好みがあります。私が内科外来をしていても、女性の患者から「女性の先生でよかった！」といわれることがたまにあります。妊婦初期の患者からは「女性の産科医を紹介してほしい」と頼まれることもあります。逆に、男性のプライベートな場所に皮膚疾患があるときなど、「女性医師だからみせたくない」といわれたこともあります。こればかりは患者の好みですから、男性、女性医師ともにそれぞれの役割があり、どちらが有利という問題ではないでしょう。